

阿寺溪谷における各種事業の実施に対する一考察

野尻・阿寺森林事務所 ○沖 義裕

志水俊幸

要旨

野尻営林署管内の阿寺溪谷は、観光地であると同時に人工ヒノキの生産地である。そこで、アンケート調査をもとに、どうすれば林業と観光の共存が可能であるかを考察した。その結果、遠景、近景それぞれの目標林型を明確にし、それに応じた施業が必要であり、各種事業も、安全や、景観を考慮した方法で行う必要があることが解明された。これからも、林業と観光の共存の可能性を考えていきたい。

はじめに

近年、自然環境に対する関心が年々高くなっており、野尻営林署管内の阿寺溪谷にも、数多くの観光客が訪れる。同時に、阿寺溪谷流域は、木材生産林も多く、いろいろな事業が行われている。

そこで、アンケート調査を行い、観光客の意識をつかみ、今までの事業と重ね合わせて、観光と林業の共存のための一つの指針を探ってみた。

1 阿寺溪谷の概要

阿寺溪谷は、長野県南部の本曾川右岸に位置し、長野県の自然100選に選ばれている。主に県内や中京方面の観光客が多く、その数は年間数万人を数える。

溪谷周辺は、約240㍍の森林空間利用林、100㍍の国土保全林、1000㍍の木材生産林がある。そして、この人工林は、高齢級で木柄がよく、材が赤く美しいため、阿寺ヒノキとして有名である。

2 調査方法・結果

アンケートは7月から11月にかけて、キャンプ場利用者を中心とした、観光客80人について、対面聞き取り方式で行った。

その結果、阿寺溪谷ぞいの森林についてなにを感じるかという問いに対して、大部分の人が森林に美しさを感じ、溪谷とのコントラストだけでなく、遠くの森林や、道ぞいの森林にも美しさを感じると回答した。(図-1)

次に、溪谷ぞいの木を切ることにについてどう思うかという問いには、絶対に切っ
てほしくないという意見は少なく、景観、国土保全を考慮するなら、切ってもさし
つかえないという意見が多かった。(図-2)

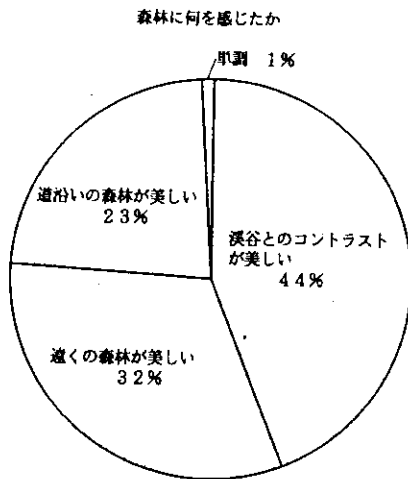


図-1

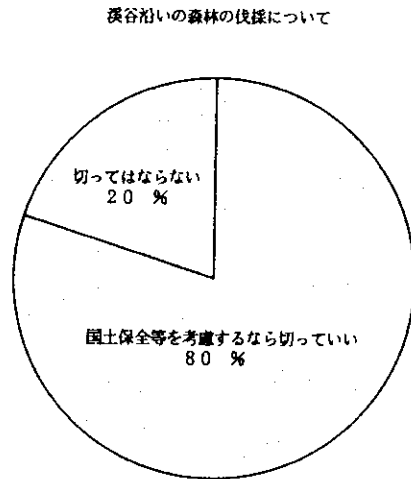


図-2

次に、除伐や枝打などの手入れをしたヒノキ人工林と川沿いのサワグルミなどの天然広葉樹林の写真を見せどちらを好ましいと思うかという問いに対して、6割が人工林の方が好ましいと回答した。(図-3)

人工林は、とかく単調であり、植生が単純化するという理由から、風致的には、あまり好ましくないとされることが多いが、人工林も手入れをすれば整然とした美しい景観を作り出し、風致的な面での一つの構成要素になることが理解できた。

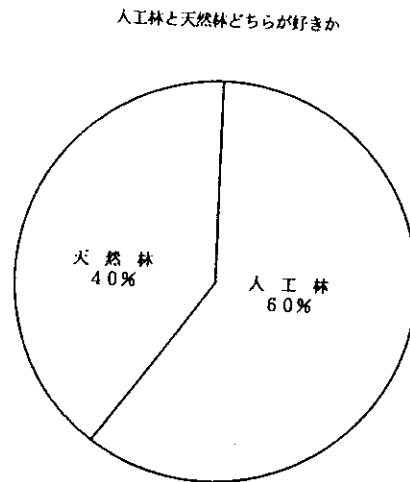


図-3

立木の伐採は景観に影響を与えるが、どの様な方法が好ましいかを知るために、伐採をしていない場所と、複層林・小面積皆伐、大面積皆伐の方法で伐採した場所の写真を見せどれが好きかを尋ねた。すると、伐採していないものと、伐採したものの回答はほぼ同数であった。(図-4)

また、伐採していないほうがいいと回答した者に、もしも伐採するならと尋ねた

とき、複層林を上げたものが6割を占めた。(図-5)

つまり、伐採方法の中では複層林が一番景観的に好ましいといえると考えた。

好きな景観(1)

好きな景観(2)

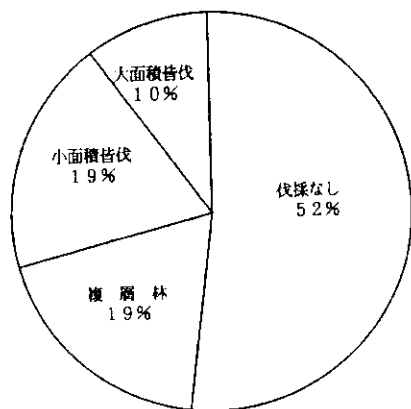


図-4

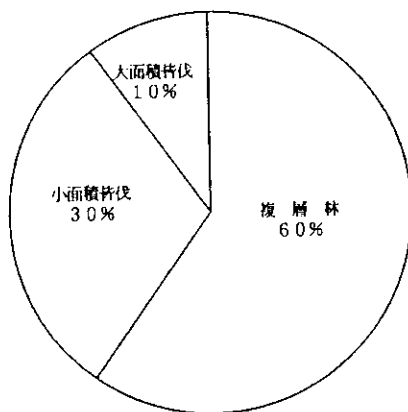


図-5

以上のようなアンケートから、次のようなことがわかった。

- (1) 木を切らないでほしいと言う意見は少ない。
- (2) 遠景、近景それぞれに固有の美しさを感じている。
- (3) 木材生産林の伐採方法では、複層林が一番好ましい。

3 実際の施業

森林施業は、遠景、近景それぞれの美しさを保ち、その目的を達成させるため、それぞれに応じたきめ細かなものが必要である。

遠景の木材生産林は、景観的に好まれ、かつ、木材生産のため、複層林施業を実施する。同時に、径級の未成熟なものについては、柱適材を中心とした、利用間伐を積極的に行い、残存木の質的向上と同時に、樹冠のうっ閉を壊さずに、木材の生産を図る。

近景の、道沿い、川沿いは森林空間利用林であり、風致的な面を重視した施業を行う。それは、道ぞいの高齢級のヒノキを間伐し、残存木の太径化を図り、下層植生が生えやすいような条件を作り、そして、川をよく見えるようにする。

同時に、溪谷ぞいのケヤキ、ホウノキなどの太径になる広葉樹は出来るだけ残し、景観的な価値と共に、材としての価値も高める。

林縁の下層植生は、木曾谷の潜在自然植生の中に、マルバノキやシロモジなど、紅葉の美しいものもあり、それらの保護に努める。観光客も林道沿いの草や木については、刈らないほうが良いと言う意見が強く、安全に支障がない限りそのままに

しておく。それは、植生の多様性を高めるだけでなく、林縁の保護や、林道の切取り盛土部分の表面浸蝕防止になる。

そして、道ぞいの若齢ヒノキは、出来るだけ枝打を実施する。

4 治山事業など

阿寺周辺は、降水量が多く、集中豪雨の多発地帯であり、治山工事は、不可欠である。しかし、画一的なコンクリートの堰堤では景観的に好ましくないため、いろいろな工法を取り入れて景観に配慮している。一つの例として、天然石を埋めこんだ装飾ブロックの使用である。もう一つの例は、伝統的な天然石の練積による工法である。自然物の使用により、景観への違和感を少なくしている。

治山事業以外にも、溪谷ぞいの盤台や土場での作業に際して、観光客の安全の確保のために信号機を設置し危険を未然に回避している。また、溪谷を美しく保つため、枝条や末木の整理を徹底している。

5 まとめ

阿寺溪谷における各種事業の指針は、以下のようになる。

森林施業は、遠景は、複層林など景観に配慮しながら、木材生産を行い、近景は、風致的なものを重視しながら、残存木の品質の向上や、林縁の保護を同時に実現していく。

治山事業は、本来の目的を果たしながら、景観に違和感を与えたり、環境に影響を与えたりしないような工法を選択する。

搬出は、安全の維持や、美観の確保を重視して実施する。

おわりに

景観のように自然を対象としたものは、一朝一夕に変えられるものではなく、それを維持しながら木材生産を行うことは様々な困難をとまなう。しかし、いろいろな面に工夫しながら、事業の実行と、観光を共存させて行きたいと思う。